



資料披露

第 44 号

編集 令和 6 年 3 月 3 1 日

発行 高森町歴史民俗資料館
長野県下伊那郡高森町
下市田 2243
電話 (0265)35-7083

印刷 (有) 雨宮印刷
電話 (0265)22-6027



目次

○あいさつ	2	●ミニ平和展	
○令和 5 年度事業報告	3	●町民ギャラリー展	
○資料館委員会等の記録	4	○親子体験教室・小正月飾り作り	9
○「時の駅」講座	5	○学校・地域との連携	9
○令和 5 年度企画展・特別展	6～8	○古文書・土器整理、清掃作業	10
●五月人形と武具展		○研究調査報告	11～17
●古地図から見える昔の高森		○令和 5 年度の記録	18～19
●北原龍太郎展		○令和 5 年度資料寄贈者	20
●高森における満州移民		○お知らせ	20
●ひな人形・美人画展		○編集後記	20

◎ ごあいさつ

高森町長 壬 生 照 玄



南信州地域では、リニア中央新幹線や関連の道路工事などが本格化し、昨年5月には三遠南信自動車道最大の難所と言われていた青崩トンネルが貫通するなど、いよいよ高速交通網とともに伊那谷の新たな時代の幕開けが近づいてきています。

そのような中、町では昨年「観光協会」を設立し、少しずつではありますが、町の魅力を内外に発信することに努めています。こうした取組みのカギとなるのがこの地域の文化や伝統芸能です。春先に行われる勇壮な獅子舞や夏から秋にかけて行われる花火の奉納など、高森町固有の歴史や文化、民俗芸能、景観資源などを誘客の一つの手段とし、伊那谷特有の温かい人間性でおもてなしをすれば、きっと訪れた皆さんは高森町を第二の故郷と考え、「もう一度この人に会いたい」、「もう一度この時間を過ごしたい」と感じていただけたらと思います。

そのためには、普段当たり前に見ている風景や過ごしている時間がどのような価値があるのかを、私たち自身が再発見する必要があります。幸い町には「時の駅」という町の歴史や文化を知るための大きな財産があります。多くの町民の皆さまが、未来の高森町のために、生涯学習の拠点である「時の駅」で学び、愛郷心とともに見識を深めていただけたことを願っています。

高森町教育長 高 野 正 延



資料館では、いろいろな体験教室を行っています。繭から糸をとったり、勾玉やトンボ玉を作ったり、土器を作って野焼きもします。

1月中旬、玄関を入ったところに、鬼木が並べられていました。鬼木というのは、邪気や災難を払い家族の安全や健康を願うものです。その後ろには、餅花や繭玉が、竹に差し飾られていました。古くからの伝統行事、小正月飾りの再現です。餅花は稲穂を表し、豊作を願います。繭玉は蚕に対する感謝の気持ちを表し、繁栄や豊かさを願います。資料館関係者だけでなく、親子の参加を募り、子どもたちも繭玉づくりなどを楽しんでいたと聞きました。

資料館に行っても感じるのは、懐かしさです。子どものころ見たり聞いたりしたものが展示されているから…？それだけではありません。自分が生まれるずっと以前から、人々の生活の中で使われてきたものがたくさん展示されています。その先人たちの営みの延長上に、自分はここに存在しているのです。先人とつながるものが自分のDNAの中にあって、どこか懐かしく感じるのだと思います。歴史や文化とふれることは、自分を知ることにつながります。これからも資料館へ足を運んでいただき、自分のルーツを感じていただきたいと思います。

資料館運営委員長 吉 田 正 治



今年度図らずも運営委員長となり、資料館「時の駅」のことを十分知らないまま大役を仰せつかりました。自分なりに一年間務めて見て、その多様さ、活動の多さに目を見開かされた思いです。事業報告にもありますように特別展、時の駅講座、体験教室、各種研究会の学習会と講演、委員会活動、学校との連携授業、その他古文書整理等数多くの内容が実施されていて、その成果が期待されます。これ以外にも他グループの集会、会合にも利用されていて、活況を呈しています。ただこれらの活動が互いに連携し、より効率よく充実したものになっていけないかと一方で思っています。さらに、館内にある歴史的価値のある資料、出土品等の町民への認知と活用も今以上に図っていく必要があるのではと思っています。遠のいていく昭和の時代を孫や幼き世代に伝え、語るのは年配者、高齢者の今できる責務ではとも思っています。館内を開放し、孫を連れ、自由に散策し、次世代に伝える。そのことがより当館を身近に感じることに繋がっていくのではと思います。

是非、町民の皆様にはお気軽に足を運んで下さり、参観していただけたらと切に願っています。

令和5年度 事業報告

館長 塩澤元広

高森町歴史民俗資料館「時の駅」では新型コロナウイルスの5類対応によりウィズコロナの状況の中ではありましたが、町内外の多くの方々にご利用頂きますとともに厚いご支援を賜り誠に有難うございました。

ここに令和5年度の事業報告をさせていただきます。



(1) 企画・特別展

- ①企画展「五月人形と武具展」 5月29日～6月9日 608名
- ②特別展「古地図から見える昔の高森」 7月1日～8月6日 679名
- ③特別展「北原龍太郎展」 9月2日～10月1日 544名
- ④特別展「高森における満州移民」 11月18日～12月10日 601名
- ⑤企画展「ひな人形と美人画」 2月25日～4月11日 677名
- ⑥ミニ平和展「高森からNO WAR!」「高森からの満州移民名簿」8月18日～9月7日
- ⑦町内小中学校作品展(中学校10月26日～11月15日、南小11月27日～12月22日、北小1月6日～1月31日)

(2) 資料館講演会「時の駅」講座

- ①第1講座「紙芝居“大願寺と南山一揆”・“下市田学校”」7月8日 紙芝居作家 清水豊・富子氏 27名
- ②第2講座「校歌から学ぶ～高森町小中学校を中心に～」9月2日 飯田FMパーソナリティー 小木曾豊氏 40名
- ③第3講座「明治の建物 下市田学校を現代にどう活かすか～下市田学校応援隊の歩み～」10月28日 高森町歴史民俗資料館運営委員長 吉田正治氏 26名

(3) 親子体験教室

- ①夏の親子体験教室(教育委員会ブンカザイルキッズ連携も含む)
 - ・第1講座「富本銭レプリカ」・第2講座「まゆから糸取り、人形づくり」7月29日(土) 19名
 - ・第3講座「勾玉づくり」・第4講座「土器づくり」7月30日(日) 29名
 - ・第5講座「トンボ玉づくり」8月5日(土) 20名
 - ・土器の野焼き 11月3日(金)
- ②小正月飾り体験教室 1月8日(月)コロナ・インフルエンザ感染防止のため餅つきと飾りづくりのみ行った。参加者45名

(4) 古文書研究会

- ・毎月第3木曜日に学習会を開催した。
- ・2月18日(日)に会員による特別研究会を行った。(高森町の井水についての古文書を読む③)

(5) 高森町史を読む会

- ・毎月第4木曜日に学習会を実施した。
- ・1月27日(土)に飯田市美術博物館青木隆幸氏の特別講演会を行った。参加者51名

(6) 委員会の活動

- ・資料館運営委員会 資料館の運営について協議 3回開催(他に小正月飾りで1回)
- ・資料館調査委員会 町内社寺にある奉納額の調査を行う 5回開催(小正月飾り作りにも参加)
- ・資料館活用委員会 年3回 小中学校・図書館と、資料館活用方策等について協議

(7) 学社連携事業

資料館と学校が連携して授業を実施した。(P9 参照)

(8) その他の取り組み

- ①蚕の飼育・大正月飾りは例年通り行った。
- ②古文書整理作業は出原「宮下家文書」、山吹「倉田家文書」、大島山「区有文書」の整理を行った。
- ③刀の手入れ作業(中塚美弘氏)
- ④初めて小学校へ入学した家庭に冊子「高森の人」を寄贈した。

(9) 入館者数 5,909名 (昭和54年開館から累計 284,450名)

見学はもちろん、多くの団体に施設を利用していただいた。(P18, P19 参照)

(10) 町民ギャラリーの活用

田中豊治氏作品展 4月12日～5月14日 497名

資料館 委員会等の記録

1. 資料館運営委員会

〈委員〉

吉田 正治 北沢 彰利
北原 みどり 宮原 祐敬 中平 榮子

〔運営委員会の主な活動〕

○定例委員会4回

- ・資料館「時の駅」の運営に関わりさまざまな提言をした。また、夏休み親子体験教室、小正月飾りづくり教室の指導も行った。

2. 資料館調査委員会

〈委員〉

(山 吹) 橋都 洋治 山路 文夫
(吉 田) 中塚 敏彦 塚平 隆
(下市田) 唐木 孝治 手塚 浩司
松村 一

(上市田) 林 祥三
(牛 牧) 林 治巳
(大島山) 佐々木 一寿
(出 原) 福沢 茂樹

〔調査委員会の主な活動〕

○定例委員会5回

- ・「掲額・絵馬」の調査について、調査カードをもとに各地区の調査を実施し、原稿執筆を開始した。
- ・小正月飾りづくりでは、飾りつけの指導をした。

○委員研修視察旅行

- ・日帰り、静岡市歴史博物館・駿府城発掘現場の研修視察をした。

3. 古文書研究会

〈組織〉

会 長 矢澤 篤 (上市田)
副会長 宮下 明子 (中川村)
会 計 畑中 定喜 (出 原)
監 事 鈴木 信孝 (下市田)
講 師 吉澤 章 (飯田市)
顧 問 福島 壽子 (下市田)
手塚 勝昭 (吉 田)
幹 事 塩澤 元広 小林 和子 (資料館)
会 員 26名 (内13名は町外の会員)

〔活動〕

○定例会 (毎月第3木曜日)

- ・高森町旧家に関する古文書や研究会発行の月報に掲載されている古文書を、講師の吉澤さんに解説していただき読み深めた。

○館外研修 (7月20日)

- ・中山道の妻籠宿から東濃8宿、可児市久々利の千村屋敷跡を訪ね研修をした。

○古文書特別研究会 (2月18日)

- ・今年度は昨年同様の研究会方式でおこなった (明治初期の大島山と吉田の水論争の解決について)。また今年度は古文書に関する地域の区長、井水管理組合の方々にも参加していただき、古文書読解による成果を地域に還元することに取り組んだ。

4. 高森町史を読む会

〈組織〉

会 長 松上 清志 (下市田)
副会長 羽生 宏敬 (下市田)
監 事 北村 重信 (牛 牧)
会 計 小林 和子 (資料館)
会 員 21名 (内1名は町外の会員)

〔活動〕

○定例会 (毎月第4木曜日)

- ・9年目を迎えた町史を読む会では、「近世」の項目を読み進めた。現地学習は、酒井幸則氏を講師に松川町上段地区の歴史を実地で学んだ。

○特別講演会 (1月27日)

- ・青木隆幸さんを講師に迎え「殿と歩く江戸〜飯田城その日その日』番外編〜」と題して講演を行った。

5. 資料館活用委員会

- ・高森南小学校、高森北小学校、高森中学校、高森町図書館の関係職員で構成し、年3回、資料館の有効活用について検討した。夏休み中の職員研修に当館見学を取り入れていただいた学校もあった。

第24回 新企画の「時の駅」講座



今年度は下記のような日程で、新型コロナウイルス5類移行対応に合わせ、「時の駅」を会場に行いました。時の駅講座の講演記録は、資料館または資料館のホームページにあります。

第1講座『紙芝居“大願寺と南山一揆”・“下市田学校”』



7月8日 27名受講

講師：紙芝居作家

清水 豊・富子 氏

今年度は、講演会形式から趣向を変えて、地元絵本作家を講師に、地元に関わる歴史を紙芝居形式で語ってもらうことにしました。

どちらの紙芝居も高森との関係が深く、資料調査をもとに創られた作品は、大人でも心に残る場面が描かれ感動するひと時でした。子どもへの働きかけをもっとすべきであったと感じました。

第2講座『校歌から学ぶ ～高森町小中学校を中心に～』

高森町関係の小中学校校歌は、著名な作詞家・作曲家によって作られた、ということは良く知られていましたが、その由来・背景にどんな方が関わっていたかをラジオ・パーソナリティー風に、謎解きをしながら語っていただきました。

高森北小学校校歌作詞者：浅井洌の独特な表現と松島八郎の関わり、高森南小学校校歌作詞者：北原阿智之助と作曲者：下総皖一をつないだ井出茂太の存在、高森中学校校歌の作詞者：窪田空穂と作曲者：山田耕作をつないだ中島正信校長の涙ぐましい働きなどが語られました。

質問で出た「小原ヶ丘」の読み方には、ある年代以後に変わったのではないかとこの解決のヒントが見えました。

9月2日 40名受講

講師：飯田FMパーソナリティー

小木曾 豊 氏



第3講座『明治の建物 下市田学校を現代にどう活かすか ～下市田学校応援隊の歩み～』

10月28日 26名受講

講師：高森町歴史民俗資料館運営委員長

吉田 正治 氏



1888(明治21)年に再建され、1911(明治44)年に現在の位置に校舎が移築された下市田学校は、平成の大修理を経て「下市田学校応援隊」が発足し、それ以降の活動の様子が詳しく語られました。修繕・補修から始まった活動も抹茶体験・飯田女子高生の邦楽演奏、小学生のお泊り体験、「おいでてや寄席」などその内容のユニークさバラエティーの多さに注目が集まりました。今後の方向として、「経験を気軽に披露する会」や「明治の小学校サミット」の提案もなされましたが、下市田学校ほどユニークな活動をしている例がなく「サミット開催は難しい」という現状にこそ、「下市田学校応援隊」の存在価値の高さが表れていると感じました。

令和5年度 企画展・特別展

企画展『五月人形と武具展』 5月29日～6月9日 入館者608名

今年も座光寺氏の甲冑や資料館寄託・所蔵の刀剣類を展示しました。また、町内より寄贈いただいた五月人形や座敷幟・兜飾り・つるし雛なども展示しました。恒例の企画展ですが、刀剣類は関心をもって見学していただきました。水戸浪士の遺した刃こぼれのある刀に興味津々の方もおられました。



特別展『古地図から見える昔の高森』

7月1日～8月6日 入館者679名

町内各所に所蔵されている高森に関する古地図が一堂に会しました。中には関ヶ原の戦いの頃の古地図も含まれていました。多くは検地帳作成時・地券発行時に集中しており、旧村ごとに残されているため対比ができるというメリットもありました。今につながる地形の様子も航空写真で比較ができ、色分けされた古地図の多さに信州大学の専門家の方も高く評価されました。現在の住所と比較し、喜ぶ方もおられました。



ミニ平和展『高森からNO WAR！』 『高森からの満州移民名簿』

8月18日～9月7日

特別展の準備として、高森関係の満州移民者の名簿を展示しました。小中学生に向かってスクラップ新聞づくりを呼びかけた「高森からNO WAR！」コーナーにも子どもたちの関心が集まり、新聞づくりコンクールに出品して受賞する児童もいました。

特別展 『北原龍太郎展』 9月2日～10月1日 入館者544名

北原龍太郎は飯田市上郷に生まれ、阿南町富草を拠点に活動した画家です。平成11年下市田の武陵地1号墳から出土した古銭が富本銭であることが分かり、大きな話題になりました。それを知った北原画伯は富本銭を題材にした日本画の大作「飛鳥富本夢幻」を制作し、



町に寄贈してくださいました。

今年は画伯没後10年となります。それを機に、当館所蔵の作品を展示し、画伯の画業や富本銭に寄せた思いを偲びたいと特別展を企画しました。

「飛鳥富本夢幻」に関わる習作を並べ、大作へと誘う展示方法を工夫しました。一緒に寄贈いただいた「青葉の笛夢幻」の習作も展示し、制作過程が分かる展示となりました。

特別展 『高森における満州移民』

11月18日～12月10日 入館者601名

今年は、ウクライナに加えパレスチナにイスラエルが侵攻するという有事の年となりました。戦争の悲惨さを次の世代に継承しようと高森関連の満州移民の事実を展示しました。全国一といわれる多くの満州移民を送出した長野県の背景や参加した人々の思いを、聞き書きや写真・事物をもとに紹介しました。「自由開拓民」という名称が本当に“自由”な立場であったのかを考えていただき、加害者・被害者の両面から問い直す展示を心がけました。詳しくは、「研究調査報告」のページ(P11～)をご覧ください。



企画展 『ひな人形と美人画』

2月25日～4月11日 入館者677名



恒例の「ひな人形と美人画」展ですが、今回は、公民館美人画教室の皆さんの作品が10点展示されました。また布喜の会の皆さん製作のつるし雛の展示とコラボ企画の「つるし雛手作り体験」を開催しました。

痛みがひどかった天保期の内裏雛1組の修復ができ、展示できたのも成果でした。

『町民ギャラリー展』 田中豊治 水墨・墨彩画展

昨年度の特別展でも鉄道関係の作品を出品いただいた、田中豊治さんの作品展を開催しました。水墨・墨彩画を中心に展示いただきました。今後も当館のスケジュールの合間に町民の皆様にご覧いただきたく思います。



小中学生の作品展示(10月～1月)



高森中学校生徒作品



高森北小学校児童作品



高森南小学校児童作品

『昭和の部屋』 オープン！ …第2展示室は“^{つくもがみ}付喪神の館”に

今年度から本館の一角に「昭和の部屋」がオープンしました。“昭和レトロ”を味わっていただきたいと昭和30～50年代を意識して関連資料を茶の間風に再現しました。「懐かしいねえ…」という言葉をいただき嬉しい限りです。

“お化け屋敷”と陰口を言われることもあった「第2展示室(民俗資料)」ですが、ハロウィーンに合わせ“付喪神の館”と呼んでいただけるように民具を解説したリーフレットをつくりました。「百年たてばモノは神になる」をキャッチフレーズに「付喪神検定」も始めました。民具(付喪神)それぞれに意味と歴史があり、まとまって見られる当館の特色に関心をもっていただけると幸いです。



夏の親子体験教室と小正月飾りづくり体験教室

今年度の親子体験教室は、感染防止対策はご家庭にゆだね、人数制限を設けて実施しました。今年度は5講座(富本銭づくり・まゆから人形づくり・勾玉づくり・土器づくり・トンボ玉づくり)を7月29日・30日・8月5日の3日間で計68名の皆さんに楽しんでいただくことができました。11月3日には、作った土器の野焼き体験も行いました。

小正月飾りづくり体験教室(1月8日)では、45名の親子、15名の運営・調査委員の皆さんが参加し、晴天のもとで餅つき、もち花・まゆ玉づくりを体験することができました。



学校・地域との連携

小中学校を中心に、今年も多くの学校で校外学習・出前授業、職員研修等に利用していただきました。

- | | |
|---------------------|--------------------|
| ①高森北小学校4年生 親子レク | ⑦広島修学旅行生 |
| ②高森北小学校 クラブ活動6回 | ⑧東京修学旅行生 |
| ③高森北小学校 職員研修 | ⑨高森南小学校5年生 総合学習 |
| ④高森中学校 職員研修 | ⑩高森南小学校3年生 昔の暮らし体験 |
| ⑤高森南小学校4年生 市田柿の学習 | ⑪高森北小学校3年生 昔の暮らし体験 |
| ⑥浜井場・追手町小学校3年生 社会見学 | |

◇そのほか「駒ヶ根つくば開成学園高校」の見学、「エコール親愛」・「楽校にじいろの花」の皆さんが勾玉づくり・富本銭づくり等を行いました。

◇資料館を毎月の定例会場として、短歌、俳句、源氏物語、音読など多くの団体にご利用いただきました。

◇ケーブルテレビを通して「時の駅にようこそ」(2か月毎)を放送し、町民の皆さんに館の様子を紹介しました。



←高森南小学校4年
市田柿の学習



高森北小学校 →
歴史クラブ見学状況

資料館活動の様子

①古文書整理作業



資料館に寄託された文書整理を行っています。現在は、大島山区有文書・倉田家文書を整理しています。今年度は古文書整理棚を新たに購入し、整理が進みました。整理された目録をもとに古文書研究会での史料研究など今後の活用が期待されます。2月18日には古文書特別研究会が開かれ、「明治初期の吉田・大島山区の水論」についての研究を発表しました。

②土器整理作業

発掘された土器の復元作業や図面づくりを進めています。今年度は下市田の堂垣外Ⅰ遺跡の弥生時代の遺物整理を行い、報告書（遺物編：弥生時代）の刊行にこぎつけました。整理作業員のお二人は、作業にも慣れ、主体的に整理を進めてくれています。夏休み親子体験やブンカザイルキッズの活動にも協力いただいています。



③清掃作業



毎月2回、館内を隅々まできれいにしています。また、休憩の間に聴く昔の高森についての話やより使いやすい館へのご意見は参考にさせていただいています。

研究調査報告 高森における満州移民

塩澤 元広

一 はじめに

今年度、特別展「高森における満州移民」を行うにあたり、戦前・戦中に旧市田村・山吹村から満州へ開拓や満蒙開拓青少年義勇軍（以下、「義勇軍」と略）として行った人々について調べてみて、いろいろなことがわかりました。この小稿では、そのなかの一端を報告したいと思います。結論からいうと、この地域の特色として、当時の人口比からみると、満州へ行った人の割合は郡全体の平均より少ないこと。しかし、そうはいっても満州移民の送出に対して両村とも否定的・消極的ではけっしてなかったこと。開拓団別でみると、水曲柳開拓団が約半数をしめ、郡の中でも高い割合をしめていること。開拓移民で行った人数は郡の中でも目立つほど多くはありませんでしたが、義勇軍については市田村は郡の中でもトップクラスに多かったことなどです。

二 旧市田村・山吹村から満州へ行った人はどれくらいいたか

満州渡満者の正確な数はわかりません。今までの調査の結果でわかったところでは、1984年（昭和59）発刊の『長野県満州開拓史 名簿編』で旧市田村・山吹村に本籍がある人は270人です。そして戦後、高森町において慰霊碑の建立をめざした人たちが町内をくまなく回って調べ、高森町関係の犠牲者と生還者の名簿『高森町満蒙関係殉難者 慰霊』を1987年刊行しました。その調査によると、『名簿編』から漏れていた人たち（幼少の子ども、他県の開拓団に行った人、敗戦前に帰ってきた人など）が115人、そして他村出身者の男性に嫁いだ女性が26人、これらを合わせると411人となります（その女性の子どもを入れれば473人、さらに夫も含めれば500人余）。かくも多くの人が戦前に満州に行ったのです。

飯田下伊那全体のなかでその特徴をみると、当時の人口のどれくらいの割合にあたる人が満州に行ったかという、市田村は3.3%、山吹村は1.8%です。飯田市・下伊那郡の全体では4.3%なので、ともに平均よりは下で、山吹村については42市村のうち36番目と下位です。

三 旧市田村・山吹村における満州移民送出の取り組み

もっとも早い移民は、市田村吉田の宮島とめ・やちの姉妹が1936年（昭和11）の第一次武装移民で長野小隊の2人の男性の妻（いわゆる「大陸の花嫁」）として渡満したのが最初です。このころから市田村の広報である『市田村報』（1941年4月から『市田村公報』）では、国策移民の募集要綱や旅費の割引、補助金などがのっていて参加を呼びかけています。その後、翌年2月、市田村の木村福司が第五次黒台信濃村の応募に合格して、一カ月の訓練を終えて渡満し、本格的に移民がはじまります。木村の渡満に際し村は役場で送別会を開き、市田駅から出発するときは金一封を贈り全村民が見送ったとされます。その後、年とともに移民者は増え、渡満時期がわかっている人のなかでは、1941年（昭和16）がピークでした。

多くの移民者を送るために村はどのようなことをしたのでしょうか。まず毎月発行していた村の広報誌

『市田村報』や『山吹時報』です。これに満洲に行った人の便りが掲載されました。これらの広報誌は満洲の人びとにも毎月送られました。それゆえ満洲からもそのお礼をかねて現状報告がつづられた便りが村に届き、それが広報誌に掲載されたのです。『市田村報』では昭和 13 年 12 月号から、「満洲便り」というコーナーがあり、義勇軍の少年たちもふくめ、満洲に行った人の便りはそこに載りました。その中身は満洲での生活や仕事の内容であり、満洲はいい所だ、ぜひ多くの人にきてほしいというものばかりです。またこの広報誌には、それ以外に開拓団の募集要綱や満洲へ行く人に対しての政府・県の補助金などものっています。それゆえこの広報誌が満洲移民の P R に大きな役目を果たしたと思われます。

1937 年（昭和 12）2 月出発の木村福司につづいて、3 月には松島自由移民の 6 名が出発しました。いずれも戸主の弟か三男・四男・五男です。自由移民でしたが村は役場で送別会を開き、駅で見送っています。この盛大な送り方はこの後もつづきました。

講演会も行われました。1937 年 1 月 14 日には一時帰国した松島自由移民の発案者・松島親造の講演会が軍人分会・男女青年会の主催でありました。『市田村報』では、その講演の聴取者の中からすぐに移民申し込みが 5 名あったとあります。3 月に出発したのはその人たちと思われます。また 1940 年（昭和 15）3 月 4 日には、県の拓務主事・塩澤治雄（松尾村出身）の講演会が小学校でありました。映画会も行われました。1941 年 5 月 3 日には市田国民学校で「大日向村」の上映会が行われました。

1940 年（昭和 15）5 月 3 日には、第八次大古洞下伊那郷開拓団として 6 人が市田駅から出発しました。そのうちの坂牧清治郎と池田高一は村会議員であり、池田は家族同伴でした。『市田村報』には「村自治のため尽瘁せられ」とあり、議員が率先して満洲へ行くことでその気運を高めようとしたものと思われます。

こうした取り組みの結果、移民の数はしだいに増え、1942 年 3 月発行の『市田村報』には 1940 年度（昭和 16 年度）の事務報告として、満洲開拓民について「・・・満洲開拓政策は年と共に成績挙がり、本村に於ても左記の諸氏満洲開拓農民として勇躍渡満せらる」として、水曲柳開拓団 16 人、下伊那郷開拓団 1 名、青少年義勇軍 10 名の名前が記されています。また「なお縁故その他の事由により又、満洲花嫁として多数の方々渡満せり」とあります。渡満年度のわかっている人をみると、夫婦で行っている場合、一緒に行くのではなく、夫が渡満した翌年に妻が行っているケースがよくあります。これは夫が先に行って現地で準備を整えてから妻を呼んだためか、あるいは独身で行った男性が、現地でこの「大陸の花嫁」を迎えたのかもしれません。村報の記述をみると、後者の例が多かったことが推察されます。両村の満洲移民送出のピークは、市田村が 1941 年（21 人）、山吹村は 1940 年（4 人）でした。

ところが、1941 年の昭和 16 年 6 月号以来、『市田村報』から満洲関連の記事はなくなります。毎号欠かさずあった「満洲だより」のコーナーだけでなく、移民の募集要綱ものもありません。渡満者は 1941 年をピークに減っていったのです。1942 年は 11 人いましたが戸主は 3 人だけで、ほかはそれまで渡満した人の家族でした。1943 年からは 1～3 人と激減します。昭和 17 年度の事務報告（昭和 18 年 3 月発行）には、「人馬の応召、徴発、工場の転出等に依り労力不足となり、開拓民送出の成績挙げず、左記諸氏開拓民として渡満したるのみにて、遺憾とするところなり」とまとめています。国内の労働力不足により開拓民送出が困難になったことがわかります。そうした状況下、村としても満洲移民の積極的な

募集はやめざるをえなかったのでしょう。

四 水曲柳開拓団

旧市田村・山吹村から満州に渡った人の約半数は水曲柳開拓団でした。水曲柳開拓団がこれほど多くの割合をしめている村は、移民数が極端に少ない所を除けばほかにありません。どうしてそれほど多くの人が水曲柳に行ったのかというと、やはり松島親造が旧市田村出身であったことが大きいといえます。親造の兄は、区長、村会議員、村長、県会議員を歴任した村の有力者・喜代太郎でした。1937年（昭和12）1月14日に、親造が市田小学校で満州移民の講演会を行うと、すぐに5名の村民から移民の申し込みがありました。そのようにして地元の市田村だけでなく隣の山吹村からも多くが参加していますし、母親の出である伊賀良村からも水曲柳に多くの人が行っています。また水曲柳だけでなく、松島自由移民は松島親造という個性あふれる人物の人柄とその豊富なネットワークによって多くの人が参加したといわれます。自由移民だったので下伊那全域から集まりました。そして郡で最大の開拓団となったのです。

水曲柳に多くの人が集まった理由は、ほかにも入植地の条件がよかったことがあげられます。水曲柳は満州のほぼ中央にあり、吉林、哈爾浜といった大都市にほぼ半日で行けました。また大部分は既耕地であり、その土地はよく肥えていました。さらに正副団長らによって地元の新聞に投稿がくりかえされ、募集広告が何度もるなど宣伝がさかんに行われました。その結果、水曲柳の名前は郡下に知れ渡りました。また自由移民ということで、政府の移民団のように内地での訓練はなく、村長の推薦が必要だけで応募しやすかったといえます。このように集団移民よりも制約が少なく、また「自由」という言葉にあこがれ海を渡った人も少なくなかったのです。

開拓団名	戸数(戸)	人数(人)
第二次千振開拓団	1	1
第五次黒台信濃村開拓団	1	9
第六次南五道崗長野村開拓団	1	2
白山子松島開拓組合	3	6
江密峰松島開拓組合	3	17
双河鎮松島開拓組合	1	1
水曲柳開拓団	36	119
第八次大八浪泰阜村開拓団	1	6
第八次新立屯上久堅村開拓団	2	10
第八次大古洞下伊那郷開拓団	7	39
第九次羅圈河大門村開拓団	1	4
第十一次永和三峯郷開拓団	1	4
長野県農業会報国農場	3	3

表：市田村の開拓団別の戸数・人数

戦後、満州から帰った下市田の串原喜代枝さんは次のように証言しています。「高森町は松島自由移民を出した町なんですよね。（略）だから今、町の人達は、彼らは自由に行った、行きたくて行ったじゃないかというんです。それだから高森町なんか本当に満蒙開拓の遺族の方については冷たかったんです。男の人達、松島自由移民の人達が出てくると、直ぐそれでパタッとたたかれるもので、自由移民の人達は手も足もでないんです。」水曲柳などの自由移民は強引に誘われて行ったのではなく、自分の意思で進んで行ったのだ、だから最近の言い方でいうと自己責任だというわけです。戦後、そのような言われ方をするほどこの地域は水曲柳など松島自由移民が多かったのです。

五 市田小学校（国民学校）はなぜ多くの子どもを義勇軍に送ったのか

『名簿編』などから飯田・下伊那における満蒙開拓青少年義勇軍の在籍者は998人、そのうち市田村出身者は45人で、これは飯田市（85人）、鼎村（61人）、松尾村（60人）、上郷村（48人）、喬木村（47人）につぐ人数であり、当地方でも多いほうです。それは全体の4.5%にあたります。開拓団についてみると、先述したように市田村は171人で飯伊全体（7,198人）の2.3%であり、また当時の人口比でも飯伊の平均以下となっていて、市田村は開拓団をそう多く送出したわけではないことがわかります。それだけに同村の満蒙開拓青少年義勇軍の多さが際立ちます。なぜそれほど多かったのでしょうか。

出発した年	人数
昭和13年（1938）	10人
同14年	1人
同15年	3人
同16年	10人
同17年	11人
同18年	3人
同19年	2人
同20年	4人
計	44人

左の表は市田村における満蒙開拓青少年義勇軍の年度別送出数です。『長野県満州開拓史 名簿編』から、出発した年と生年月日から明らかに義勇軍として行ったと思われる人を抜き出したものです。同書と異なるのは、昭和15年は同書では2人となっていますが、終戦前に負傷により帰国した松島格次を入れて3人としたこと。また義勇軍の幹部として行った河田茂一（昭和16年）と串原正典（昭和17年）は除いてあることです。同書のように入れば合計は46人、さらにその2人の妻子も入れれば50人となります。この数字からも市田村から行った満蒙開拓青少年義勇軍の人数の多さがよくわかります。しかし実際の数はいまだこれだけではなさそうです。『長野県満州開拓史 名簿編』の3年後となる1987年、『高森町満蒙関係殉難者慰霊』が刊行されました。これは高森町に満州移民の慰霊碑を建立することをめざした関係者が、町内の一戸一戸をくまなく回って調査を重ね、農業移民だけでなくほかの仕事で満州に渡った人たちも含めて、終戦までに満州に行ったすべての人をのせた名簿です。これには他県の開拓団に行った人、他村の男性のところへ嫁いだ女性、終戦前に帰国した人、他村の出身であるが戦後高森町に居住した人など『長野県満州開拓史 名簿編』には載っていなかったり、そこでは本籍が他村となっている人も掲載されています。これをみると、満蒙開拓青少年義勇軍のところで『長野県満州開拓史 名簿編』にはない人物が昭和13年に1人、同14年に1人、15年に1人（松島格次をのぞいて）、16年に1人、17年に3人、18年に3人、19年に2人の合計12人います。名字からみて旧市田村出身者とみてまちがいなさそうです。この人たちをふくめると、少年たちだけで56人、幹部やその家族もふくめて62人となり、鼎村や松尾村にならぶ数です。じつに多くの人が市田村から満蒙開拓青少年義勇軍として満州へ行ったことがわかります。

この満蒙開拓青少年義勇軍として満州をめざした少年たちの出身は、市田青年学校もあったと思われますが、大部分は市田小学校（正式には市田尋常高等小学校、昭和16年からは市田国民学校ですが、煩雑となるので以後は市田小学校で統一）だったと思われます。なぜ市田小学校は多くの満蒙開拓青少年義勇軍を送出したのでしょうか。同校には当時、そのキーマンが2人おりました。1人は校長の坂井陸海^{りくみ}です。坂井は1939（昭和14）年度から1945（昭和20）年度まで7年間学校長でした。その間、下伊那教育会の評議員、本会（信濃教育会）の代議員を務めるなど下伊那教育会では正副会長につぐ重鎮でし

た。坂井を有名にしたのは国民学校になってから、つまり太平洋戦争中の軍国主義的な教育です。毎日行う独特の学校体操は上半身を裸（11月まで）で行いました。また虚弱児には灸を施しました。このように心身を軍国主義的に鍛錬する教育で市田国民学校は有名になり、県内だけでなく県外からも多くの視察者が訪れています。そして、こうした当時としては「先進的」な教育を実践・普及するため、校内だけでなく校外の者にも開放した研究授業が年に何度もおこなわれました。義勇軍は1941年から各校に在籍生徒数の1割5分という割当てがなされ、志願者ゼロの学校の校長は校長会で会長から叱責されるなど上意下達の高い指導がされるようになっていきます。教育会の重鎮であれば、坂井も当然強い指導を行ったことが考えられますし、自分が直接指導しなくても職員が校長の立場を忖度し、生徒の説得に直接あたる高等科2年の担任などは多くの生徒を送出することをめざし、強い指導を行ったものと推察されます。

もう1人のキーマンは訓導の林重春^{しげはる}です。林は坂井と同じ1939（昭和14）年度から1945（昭和20）年度まで同校に7年間在籍しました。その間、体錬科の主任などを務め、坂井の特色ある学校経営を中核で支えた人物でした。下伊那教育会において義勇軍送出を担当したのは1940～41年が卒業生指導部、42年～45年が興亜部でした。ここに所属した5～7名の委員が、内原（茨城県）で行った拓務訓練への教員派遣、高等科2年の生徒を集めて行った拓務訓練、その担任を集めて行った義勇軍送出の打合せ会などを企画・運営していたのです。つまり郡の義勇軍送出のヘッドにあたる部署でした。林はこの委員を1941年から45年まで務めています。つまり各校の高等科2年の担任らを指導して多くの子どもを義勇軍に送る元締めだったのです。たとえば拓務訓練は毎年秋（10月や11月）に高等科2年で義勇軍に該当するような生徒を集め、4泊5日下伊那農学校で行った集団訓練です。林はその指導者として毎年出張で全日程参加しています。大河原小学校から満蒙開拓青少年義勇軍に行った木下良明さんは、下伊那農学校で行った拓務訓練で「林重春という元校長先生と藤綱先生でいろいろ教えてくれた。日本^{やまと}体操^{ぼたらき}なんて体操をやったり、霜柱がこんなにあるところを走り回り、・・・」と語っており、林が拓務訓練の指導者であったことがわかります。戦後の1974年に、下伊那教育会が満蒙開拓青少年義勇軍を回顧して行った座談会で、林は興亜部として送出の旗振り役となった当時をふりかえり、次のように語っています。

「上からの命令の数を獲得しなくてはならないという必死なものがあり、またわれわれの腹として、数をそろえるために『いや』というものを無理に行ってもらうわけにはいかないという教育者としての良心から、ほんとうの興亜精神というものになってもらわなくてはいけないというふうに考えておりましたので、非常に苦労しました。」

割当数を確保しなくてはいけないという重圧と、いやがるものを無理にいかせるわけにはいかないという「教育者としての良心」の狭間で苦心したことがわかります。そこで林らが考えたことは、「興亜理念にのっとって子どもたちが喜んで義勇軍に行ってくれるような気分になってもらわなくてはならないんだ。・・・教育会の委員会がその仕事を推しすすめる本部のような形になったわけです。」ということで、林ら委員だけでなく、内原訓練所の副所長、上伊那農学校長、県の拓務主事（塩澤治雄：松尾村出身）らを講師に招き、義勇軍の使命についての話をくり返しやってもらいました。その結果、多くの

生徒がそれに感動し、満州へ行く決意をかためたといいます。

そもそも林は座光寺小学校に在籍していた 1932 年に満州に視察に行っており（郡で最も早い視察とされます）、早くから満州に関心を持っていました。それ以来、満州に関わりを持つことになり、1941 年には教学奉仕隊として郡を代表して 1 ヶ月満州の各地をまわり、義勇軍の訓練に励んでいる生徒たちの指導にあたりました。また同年 3 月には、郡を代表して義勇軍生徒を内原訓練所（茨城県）まで引率しています。そのような人物ですから、当然市田小学校でも義勇軍送出の中心になっていたのは間違いないと思われます。当時高等科 2 年生であり、義勇軍に応募することになる田戸（旧姓：樋口）純市さんに聞き書きしたところでは、田戸さんは林のクラスではなかったのですが、「自分の担任（大原久雄訓導）も義勇軍をすすめたが、林訓導の方が熱心にすすめた。」と言っています。

また同校では、義勇軍に行った卒業生が一時帰国（帰郷）したときなど、高等科や青年学校の生徒に義勇軍についての講話をしてもらっています。学校日誌を見るとそれが毎年 1 回はあり、昭和 16 年度は 3 回も行われています。義勇軍の生徒が出発する時は、全校で壮行式を行い駅で見送りました。1942 年 5 月 24 日には、高等科の全員と市田青年学校 1 年生が、飯田市の城下グラウンドで行われた義勇軍の祈願祭と壮行式に飯田まで出かけ参加しています。以上のことから、市田小学校が義勇軍のことをいかに重視し大事に考えていたかがわかります。

さらに 1941 年 1 月 6 日には同校の義勇軍父兄会ができました。この会の発会の趣旨と規約によると、まず発会の趣旨として「義勇軍は国策遂行の第一線にたつもの」「皇国八紘一宇実現の第一歩」「実に満州こそ大東亜建設の據点である」「興亜聖業の生命をもって任ずる義勇軍運動」といった仰々しい言葉が並び、義勇軍に行った子どもの支援を行う一小学校の父兄会としては違和感を覚えるような大仰なものです。ここには坂井や林の皇国思想が読み取れそうです。実際に父兄会記録をみると、議事の最初に議長であった校長がこれを朗読し、説明をなしたとあります。この会は義勇軍に行った生徒の保護者によって組織され、会長は村長、副会長は校長で、理事は保護者の中から選ばれた 5 人に加えて学校の首席訓導と役場の拓務係、幹事は学校の訓導ということで、趣旨と同様学校主導の組織であったことがわかります。活動内容は、同村出身の義勇軍（現地に行ってから義勇隊）の慰問や激励、花嫁や後続の義勇軍の送出について後援や斡旋をすることなどです。

写真は父兄会が発足したときに撮ったもので（高森町吉田 下村公嘉さん提供）、円内の人物は左が会長の関川一實市町村長、右が副会長の坂井校長、前列中央の 3 人は義勇隊から一時帰国していた人たち、前列右から 2 人目が林訓導です。以上のことから、市田小学校が義勇軍のことをいかに重視し、多くの生徒を送ろうと考えていたかがわかります。



六 おわりに

市田村から満蒙開拓青少年義勇軍に参加した 62 人のうち、日本に帰還できたのは、途中で帰国した 2

人や渡満せずに終わった最後の年の4人をふくめて45人。死亡した人が17人です。1941年渡満した人をふくめ、それ以前の人は全員召集されました。約半数余となります。終戦前の現地での根こそぎ動員です。そのうちシベリアへ抑留された人が5人、ほかのソ連の収容所へ入れられた人も3人います。死亡理由でわかっているのは、戦死6人、栄養失調3人、病死3人などです。

1941年に義勇軍として渡満した田戸純市さんは、終戦直前の5月に応召、その後シベリアに抑留され強制労働につき、終戦後の1948年に帰国しました。その体験を求められれば公民館などで話したり文章にされてきました。田戸さんは満蒙開拓青少年義勇軍のことをつぎのように振り返っています。

「・・・たえ吾々の過去が『大陸侵略』のお先棒を担いだと後世の歴史が評価したとしても、この時代の若い青少年の純粹無垢の愛国の至情、その激しく燃えた吾々の心まで否定することはできまいと思う。吾々は軍人として戦争しようと思って行っただけではない。或は一部資本家のように現地人を搾取しに行っただけでもない。吾々は北満州の荒野を開き、耕し、種を播いて農地に変えようとしたのだ。吾々の夢は王道楽土であり、五族協和の国造りであって、その動機はまことに純粹であり、その行動は忌まわしいところは毫もなかった。・・・今ここに満州開拓とは一体何であったのか。吾々が志願し、青春の血をたぎらせた青少年義勇軍とは一体何であったのか。振り返って考え、自問自答に苦しむ。満州開拓もようやく緒に付いた時にソ連の侵攻にあい、敗戦を境に今世紀もっとも悲惨きわまる最大の犠牲者を出し、あげくのはては『中国侵略』『加害者』として歴史の上にその名を残された。吾々開拓民自身の歩み来った道を省みて、口惜しさにじっと耐えながら、異郷の山野に望郷の念を抱いて散華した拓友・戦友の御霊に、あらためて深く頭をたれ涙を流すのである。」

まさに田戸さんの心の叫びです。私たちは子どもたちに二度とこのような思いをさせてはいけません。そのためには、曇りなく真実を見抜く目と人権感覚をみがくことが大切と、満蒙開拓青少年義勇軍の歴史が語っているように思います。

参考文献

- ・本島和人『満洲移民・青少年義勇軍の研究』（吉川弘文館 2021年）
- ・『飯田下伊那の少年たちの満洲日記』（飯田市歴史研究所 2019年）
- ・『高森南小学校沿革史』（1985年）
- ・満蒙開拓を語りつぐ会『下伊那のなかの満洲 聞き書き報告集7』（2009年） 『同 1』（2003年）
- ・「座談会『満蒙開拓青少年義勇軍』（『下伊那教育』第102号 1974年）
- ・『昭和十五年度 学校日誌 市田尋常高等小学校』（高森南小学校所蔵）
- ・『市田村報』『市田村公報』（高森町図書館所蔵）
- ・『山吹時報』（高森町山吹 倉田雅子氏寄託）
- ・『満洲移民 飯田下伊那からのメッセージ』（飯田市歴史研究所 2007年）
- ・田戸純市「満蒙開拓を追悼して拓友を悼む」（『史談会だより』下市田史談会 2015年）

＊ ＊ ＊ **令和5年度の記録** ＊ ＊ ＊

利 用 団 体 名 称 と 人 数		
4 月	町内	松岡城址愛護会(8) 源氏物語講読会(12) 気学の会(6) 短歌歩道の会(6) わかば勉強会(7) 美人画教室(4) 音読の会(6) 資料館事業説明会(4) 高森町史を読む会(20) きさらぎ会(7) 資料館調査委員会(8) ひだまりの会(5) 高森町史学会総会(19) 滝里歌会(8) 牛牧歌会(5) 資料館運営委員会(5) 高森自由大学役員会(8) 古文書研究会(16) 布喜の会(14)
	町外	なし
5 月	町内	井上井月下伊那支部(6) 布喜の会(13) 下市田1区育成会(23) 白夜短歌会(6) きさらぎ会(7) 古文書研究会(18) ひだまりの会(7) 高森自由大学役員会(6) 退公連(3) 短歌歩道の会(5) 高森町史を読む会(14) 高森町史学会研修旅行(38) わかば勉強会(3) 資料館活用委員会(5) 気学の会(7) 高森BC(32) 源氏物語講読会(12) 牛牧歌会(6) 音読の会(4) 滝里歌会(10)
	町外	上郷公民館別府下分館(42)
6 月	町内	グランスマイル(14) きさらぎ会(6) 高森町史を読む会(16) 高森北小4学年親子レク(40) 源氏物語講読会(11) 松岡城址愛護会役員会(6) 資料館調査委員会(11) 古文書研究会(17) 短歌歩道の会(5) 牛牧歌会(6) 白夜短歌会(6) 気学の会(5) 滝里歌会(5) 布喜の会(18) ひだまりの会(1) 飯下建設労連(31) 北小クラブ(7) 花とあそぼ(30) 音読の会(3)
	町外	駒ヶ根つくば開成学園高校(33)
7 月	町内	資料館活用委員会(4) 白夜短歌会(9) 夏休み親子体験教室(43) 第1回時の駅講座(27) 高森BC(26) 気学の会(7) 滝里歌会(9) 音読の会(4) 教育セミナー(9) 体験教室支援運営調査委員(10) ひだまりの会(4) 高森自由大学(9) わかば勉強会(5) 北小職員研修(7) きさらぎ会(6) 古文書研究会館外研修(14) 牛牧短歌会(6) 高森町史を読む会(16) 源氏物語講読会(14)
	町外	なし
8 月	町内	源氏物語講読会(13) 牛牧歌会(5) 滝里歌会(9) 夏休み親子体験教室(15) わかば勉強会(6) 古文書研究会(15) 短歌歩道の会(3) 白夜短歌会(8) 高森中職員研修(20) ひだまりの会(5) 井上井月下伊那支部(5) 高森町史を読む会(13) 花とあそぼ(29) 気学の会(5) 虹色の会(8) きさらぎ会(6)
	町外	下伊那教育会地理委員会(12) エコール親愛(21) 駒ヶ根市教育委員会(3)
9 月	町内	第2回時の駅講座(40) 気学の会(7) 資料館運営委員会(5) 北小クラブ(21) きさらぎ会(5) 滝里歌会(8) 高森町史学会幹事会(8) あさざりサロン(20) 牛牧歌会(6) 古文書研究会(17) 音読の会(7) 高森自由大学(4) ひだまりの会(3) 短歌歩道の会(4) 夏休み親子体験教室(32) 高森資料館調査委員会(11) 高森キッズサイエンス(6) 源氏物語講読会(12) 白夜短歌会(9) わかば勉強会(5) 高森町史を読む会(17) 尾地家(2)
	町外	南春近公民館(14) 楽校にじいろの花(2)

皐月の空のこいのぼり



お蚕様の誕生



他地区公民館による見学会



		利 用 団 体 名 称 と 人 数
10月	町内	木鶏の会(5) 南小4年生(118) 短歌歩道の会(5) 第3回時の駅講座(26) ひだまりの会(5) 高森自由大学(47) 高森BC(14) 高森町史学会(4) 資料館運営委員・調査委員視察研修(9) 源氏物語講読会(13) 高森キッズサイエンス(29) 気学の会(5) 牛牧歌会(4) 音読の会(6) 松岡城址愛護会(5) 井上井月下伊那支部(6) 白夜短歌会(9) きさらぎ会(6) 布喜の会(9) わかば勉強会(5) 地域史跡巡り(35) 滝里歌会(7) 古文書研究会(14)
	町外	浜井場小・追手町小3年生(45) 広島修学旅行生(4) 東京修学旅行生(5)
11月	町内	わかば勉強会(4) ひだまりの会(4) 音読の会(8) 下市田史談会(8) 高森自由大学役員会(5) 源氏物語講読会(11) 土器焼き(10) 気学の会(7) 井上井月下伊那支部(6) 白夜短歌会(9) 滝里歌会(8) 短歌歩道の会(4) 古文書研究会(14) 高森町史を読む会(11) きさらぎ会(6) 牛牧歌会(4) 木鶏の会(5) 布喜の会(12) 南小5年生(28)
	町外	どんぐりの会(8) 喬木村食の会(8)
12月	町内	滝里歌会(10) 源氏物語講読会(11) 高森町史学会幹事会(9) 気学の会(17) 花とあそび(30) 牛牧歌会(6) エンジョイ・スクエア(8) ひだまりの会(6) 高森自由大学(30) 布喜の会(11) 白夜短歌会(7) きさらぎ会(6) 短歌歩道の会(5) わかば勉強会(4) 井上井月下伊那支部(5) 高森BC(11) 高森町史を読む会(16) 音読の会(4) 古文書研究会(14)
	町外	なし
1月	町内	気学の会(8) 源氏物語講読会(13) 牛牧歌会(5) 古文書研究会(15) 井上井月下伊那支部(7) 資料館調査委員会(11) 町づくりを語る会(33) グランスマイル(6) 小正月飾り作り体験(45) 音読の会(5) 滝里歌会(16) 資料館活用委員会(5) エンジョイ・スクエア(2) 布喜の会(15) 白夜短歌会(7) ひだまりの会(3) きさらぎ会(6) 南小5年生(19) 高森自由大学役員会(6) 短歌歩道の会(8) 木鶏の会(6) わかば勉強会(7) 高森町史を読む会講演会(52) 高森BC(39)
	町外	なし
2月	町内	高森自由大学(24) 町文化財調査委員会(21) 古文書研究会打ち合わせ(5) 短歌歩道の会(8) 源氏物語講読会(11) 音読の会(4) 古文書研究会(20) 本学神社総代会(4) 南小3年生(66) ひだまりの会(6) わかば勉強会(6) 気学の会(8) 滝里歌会(9) 牛牧歌会(6) 木鶏の会(3) きさらぎ会(6) 布喜の会(14) 高森町史を読む会(14) 避難訓練(9) 白夜短歌会(8)
	町外	なし
3月	町内	南小3年生(36) 南小5年生(32) 高森キッズサイエンス(35) 気学の会(6) 北小3年生(19) わんぱく冒険隊(19) 資料館運営委員会(4) 源氏物語講読会(12) 滝里歌会(8) 牛牧歌会(6) 松岡城址愛護会(7) まちづくりを語る会(38) 短歌歩道の会(6) 音読の会(5) 木鶏の会(10) 白夜短歌会(8) 資料館調査委員会(11) ひだまりの会(14) 古文書研究会(13) 布喜の会(15) わかば勉強会(6) 高森町史学会幹事会(13) 井上井月下伊那支部(4) 高森自由大学役員会(4) つるし雛手作り体験(27) きさらぎ会(7) 高森町史を読む会(16) 花とあそび(34) 高森BC(20)
	町外	なし

地域巡り(瑞応寺見学)



高森南小学校3年 社会見学

お化粧直しを終えた天保期のおひな様



入館者数：令和 5 年度及び昭和 54 年 11 月の開館以降の累計 3月31日締

★令和 5 年度	5,909 名（町内 5,199 名 町外 710 名）
★開館以降の累計	284,450 名（町内 223,212 名 町外 61,238 名）

令和5年度 資料寄贈者御芳名

品 名	寄 贈 者	品 名	寄 贈 者
座光寺氏の硯	山吹 清水要	鋏	下市田 原田嘉治
古レコード盤・名所絵葉書・小ピアノ	牛牧 原幸恵	板垣退助書簡	下市田 松島悦男
ラジカセ・コカコーラ瓶他	下市田 東垣外準	刀 1 振	下市田 原博文

令和 5 年度寄贈本一覧

書籍 1 冊・写真集 4 冊	吉田 下村公嘉	新しいお金のはなし	ナツメ社
吉田の里 歴史散歩	吉田史学会	拔萃のつづり その八十三	クマヒラ・ホールディングス
豊丘風土記 第 27 集	豊丘史学会	史談会だより 41 号	下市田史学会
子安神社について	山吹 山崎房人	伊那谷写真農業史	飯田市 斉藤英夫

資料館 寄託資料

奉納額（鐘馗像）1 点	萩山神社
-------------	------

資料館からのお知らせ

古文書・古い資料を捨てないで資料館にぜひ一報を！
なつかしい昭和の物も！

◆皆さんのお家に眠っている古文書類などの古い資料は、歴史を解き明かす大事なものです。江戸時代・明治時代の古文書類はもちろん、古い書籍、写真、軍事郵便などの戦前の資料等々捨てる・燃やす前に資料館へご一報ください。また資料館では、最近昭和の物も収集しており、ワープロやファミコンなどの寄贈をうけました。そうした物も大歓迎ですので、ご連絡ください。今年度、「昭和の部屋」を増設しました。懐かしい物を見ながら、若き日の話に花を咲かせるのはいかがでしょうか？

編集後記

新型コロナウイルスが 5 類に移行し、感染対策に留意しながら、今年度も特別展や企画展、時の駅講座などの活動が計画通りできたこと、また親子体験教室も人数制限はしたものの多くの皆様にご参加くださったことは何よりであったと思います。特に今年度は、「昭和の部屋」ができ、ちゃぶ台の前に座って懐かしい話に笑顔がこぼれる皆様の姿を見て、「楽しむ資料館」が近づいてきたなと感じる 1 年でした。第 2 展示室では、古びた「市松人形」が専門家から貴重な資料だと指摘を受けました。民具一つ一つに使われた時代の庶民の心がこもっていると再認識できました。これからも「モノは 100 年たつと神になる」を合言葉に、“付喪神（つくもがみ）”様が居並ぶ館を守っていきたいと思います。（竹内 稔）

